

【研究ノート】

多様性の受容や尊重を実現するための要因の検討

——学生の援助観との関連から——

堀 由 里

Examination of Factors for Achieving Acceptance and Respect for Diversity

—Relation to Students' View of Help-Seeking Preferences—

Yuri HORI

問題と目的

近年、特別の支援を必要とする子どもたちが増えている背景から、保育や教育の現場においてインクルージョンが求められている。鬼頭（2017）はインクルージョンを、あらゆる人々を対象とし、学習者の出席・参加・達成を保障することであり、この多様性に対応するために、常に今ある教育を目の前にいる子どもたちのニーズに合わせて教育・保育を創りだしていくこと、としており、インクルージョン達成の前提として多様性を受け入れることや尊重することが求められているといえる。保育所保育指針2章4の「保育の実施に関して留意すべき事項」にも「子どもの国籍や文化の違いを認め、互いに尊重する心を育てるようにすること」や「子どもの性差や個人差にも留意しつつ、性別などによる固定的な意識を植え付けることがないようにすること」が明記され（厚生労働省、2017）、保育者自身も子どもや家庭の多様性を十分に認識し、互いに尊重し合える雰囲気を作り出すよう努めることが求められている。

これまで多様性は、集団の創造性を高めるための必要条件であると考えられていた（Jackson & Whitney, 1995; Moreland, Levine, & Wingert, 1996）。しかしその一方で、コミュニケーションによる成員相互の共通理解が困難になったり（Newcomb, 1953）、話し合いのプロセスにおいて強い対人的葛藤を感じたりするなど（山口、1998）、多様な人がいるからこそその抵抗や葛藤があることも示されている。したがって、多様性を受容し尊重することに際しては、現実的な困難も伴いやすいと考えられる。しかしながら、多様性を受容することに関して、当事者や家族以外の人間を対象とした研究は少ないのが現状である。

そこで、保育者や教育者として対人援助職を目指す学生たちが、多様性社会を実現するためにどのようなことが必要だと考えているのかを調査し、保育や教育の現場において多様性を受け入れる土壌づくりの示唆を得ることを本研究の目的とする。その際、多様性の受容や尊重のために必要な視点は、その人が持つ援助観とどのように関連しているのかも併せて検討する。

方法

【研究対象者と調査時期】

保育者や教員を目指し勉強をしている大学3年生112名（全員女性、平均20歳）を対象に、担当する授業内でwebによるアンケートを2022年5月に実施した。尚、研究実施にあたり、大学の研究倫理審査委員会において審査を受け、承認されている。倫理的配慮として、研究参加者である学生には、授業の一環として調査を行うことを伝え、個人情報保護と研究内容の説明および同意を口頭・調査画面上で行った。

【調査内容】

(1) 多様性の受容と尊重に必要なこと

現代社会において「多様性の受容と尊重」が求められていますが、それを実行するためには、どのようなことが必要だと思うか、自由記述で回答を求めた。

(2) 援助観

① 田村・石隈（2001）の被援助志向性尺度（11項目、5件法）を用いた。“困っていることを解決するために、他者からの助言や援助がほしい”というような項目からなる「援助の欲求と態度」、 “自分は、人に相談したり援助を求めるとき、いつも心苦しきを感じる” というような項目からなる「援助関係に対する抵抗感の低さ」という2つの下位尺度から構成される。

② 佐々木・山崎（2002）のコーピング尺度の下位尺度である情緒的サポート希求（8項目、5件法）を用いた。「嫌な出来事、困った出来事に直面した時、日常一般的にどのように行動したり考えたりしているか」という教示のもと“身近な人に励ましてもらう”などの項目から、「情緒的サポート希求」は構成される。

結果

まず、自由記述で回答された多様性の受容と尊重のために必要なことを心理学者2名でKJ法により分類した（表1）。尚、未回答や分類不能なものについては分析対象外とし、得られた100件の回答を分類した。

違いを認めたり、受け止めたりするなど共感する心が必要であるとの回答が一番多くあがった。一方で、固定概念を持たないことや自分の当たり前を当たり前と思わないなど、自身の認知的枠組みを俯瞰的に捉えることや、知っていくことから必要だとするもの、様々な人と関わっていくことなど行動面を挙げる回答もあった。

これらの分類を更にまとめたところ、多様性の受容と尊重に必要なことは、他者を理解したり受け止めたりする（共感）など他者に対する態度を変容しようとする意識（対他的視点に基

づく意識)と、自身の認知を変容したり(認知的枠組み変容)、知識をつけたり(知識獲得)、コミュニケーションの持ち方を変えようとしたりする(行動)など、自身の成長や態度の変容を促す意識(対自的視点に基づく意識)に分類できることが示された。

表1 多様性の受容と尊重のために必要なこと要因(件数)

大カテゴリー	小カテゴリー
共感(54)	受け止める
	違いを認める
	相手の立場に立つ
認知的枠組み変容(23)	固定概念を持たない
	自分の当たり前を当たり前と思わない
	自分もいろんな人の一人
知識獲得(14)	知る
	教育
	環境を整える
行動(9)	人に関心を持つ
	色んな人と関わる
	話を最後まで聞く

次に、多様性の受容と尊重への考えが対他的視点を挙げた参加者(N=54)と対自的視点を挙げた参加者(N=46)に分類し、援助観として取り上げた被援助志向性や情緒的サポート希求の心理尺度得点を比較した(*t*検定)。

分析の結果、被援助志向尺度の「援助関係に対する抵抗感の低さ」とコーピング尺度の「情緒的サポート希求」において、対自的視点群よりも対他的視点群の得点が高い傾向にあった(それぞれ、 $t_{(98)}=1.84, p<.10$; $t_{(98)}=1.74, p<.10$ 、図1-2)。被援助志向尺度の「援助の欲求と態度」に関しては有意な差は得られなかった。

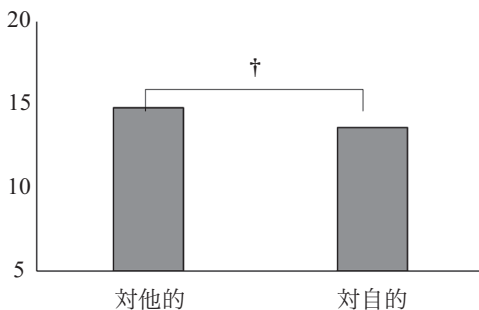


図1 援助関係に対する抵抗感の低さ得点

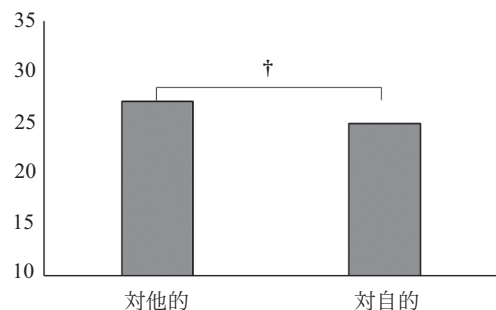


図2 情緒的サポート希求得点

考察

本研究は、保育者や教育者として対人援助職を目指す学生たちを対象に、多様性社会を実現するためにどのようなことが必要だと考えているのかを調査することを目的とした。また、多様性の受容や尊重のために必要な視点は、その人が持つ援助観とどのように関連しているのかも併せて検討した。

まず、多様性の受容や尊重のために必要とされる意識には、他者に対する態度を変容しようとする意識（対他的視点に基づく意識）と自身の成長や態度の変容を促す意識（対自的視点に基づく意識）の2種類があることが示された。このことは、多様性の受容や尊重を考える際に、まず相手に焦点を当てて理解していこうとする考え方や、自身の受容できる幅を広げようとする考え方の2つの方向性があることを示唆するものである。

次に、他者に対する態度を変容しようとする意識（対他的視点に基づく意識）を持つ人は、自身の成長や態度の変容を促す意識（対自的視点に基づく意識）を持つ人よりも、援助されることに対する抵抗感が低く、他者に情緒的サポートを求めやすい傾向にあることが示された。対他的視点に基づく意識を持つ人は、他者に近づいていくことに躊躇いが少ないため、他人から援助されることや他者にサポートを求めることに抵抗が低いと考えられる。それゆえ、援助においても、相互的・互恵的に捉えている可能性が高く、援助者一被援助者という固定的な関係性にはとどまりにくいと推察される。

一方で、援助されることやサポートを求めることに抵抗感を示すことは、自分一人で問題を解決しやすい傾向にあると考えられる。すなわち、対自的視点を持ちやすい人は、一人で課題解決に向かいやすく、援助や支援において一方向でのインクルーシブ観を持ちやすいと予想される。堀（2022）でも示している通り、インクルーシブ教育は一方向的な立場の上下があるような関係性ではなく、お互いに配慮し、配慮される、という互恵的な関係として捉えていく必要がある。対自的視点を持ちやすい人は、そのような感覚を持てるように、対他的な視点に基づく意識も高めていく必要があると考えられる。具体的には、人と助け合う経験を積んでいくことを教育の中で取り入れていくことが求められるのではないだろうか。

最後に本研究の課題を示す。まず、多様性の受容や尊重に必要なことについて自由記述で回答を求めたが、「わからない」や未回答、「インクルーシブ」など連想するキーワードのみを書いた参加者も一定数いた。教示が曖昧で適切な回答ができなかった可能性もあるため、教示について再考する必要がある。また、本研究で得られた自由記述はほぼ1つの回答のみが記載されていたため、調査協力者は対他的視点に基づく意識を持つ群と対自的視点に基づく意識を持つ群のいずれかに分類されたが、多様性の受容や尊重のためには両方の視点に基づく意識を形成することが重要であると考えられる。本来、対他的視点と対自的視点は両極的なものではなく、それぞれ独立した視点であると考えられる。したがって、今後は、それぞれの程度に基づいて、対象者を分類し、心理的要因との関連について検討していく必要があるだろう。

引用文献

- 堀由里 (2022) 対人援助職を希望する学生の配慮や支援に対する心理的抵抗感—合理的配慮に対する意思表示の難しさ— 桜花学園大学保育学部研究紀要、26、73-79.
- Jackson, S. E., May, K. E., & Whitney, K. (1995) Understanding the dynamics of diversity in decision-making teams. In R. A. Guzzo, E. Salas, & Associates (Eds.), *Team effectiveness and decisionmaking in organizations*. pp. 204-261. San Francisco: Jossey-Bass.
- 鬼頭弥生 (2017) インクルーシブ保育の理念と方法 豊岡短期大学論集、14、433-442.
- 厚生労働省 (2017) 保育所保育指針 フレーベル館
- Moreland, R. L., Levine, J. M., & Wingert, M. L. (1996) Creating the ideal group: Composition effects at work. In E. Witte & J. H. Davis (Eds.), *Understanding group behavior: Small group processes and interpersonal relations Vol. 2*, pp. 11-35. Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Newcomb, T. M. (1953) An approach to the study of communicative acts. *Psychological Review*, 60, 393-404.
- 佐々木恵・山崎勝之 (2002) コーピング尺度 (GCQ) 特性版の作成および信頼性・妥当性の検討 日本公衆衛生雑誌、49、399-408.
- 田村修一・石隈利紀 (2001) 指導・援助サービス上の悩みにおける中学校教師の被援助志向性に関する研究—バーンアウトとの関連に焦点をあてて— 教育心理学研究、49、438-448.
- 山口裕幸 (1998) メンバーの多様性が集団創造性に及ぼす影響 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門)、42、9-19.

(受理日 2023年1月5日)